

図 2-6-26 主要水準点における累計地盤沈下変動図 (地下水利用等基礎調査, 1980年3月, 京都府)

盛んで、被圧水頭は年々低下している。また、地盤沈下も発生しており、1975～87年までの間で2 cm 以上の沈下量が観測されている (図 2-6-26)。

(宮島吉雄)

## (2) 地下水

京都盆地では、扇状地性堆積物である上部洪積層に主として不圧地下水が、大阪層群に被圧地下水が賦存する。

上部洪積層のうち、扇状地性堆積物は京都駅以北に発達している。透水量係数は  $2 \sim 4 \times 10^{-2} \text{ m}^2/\text{s}$  程度となっている<sup>(2)</sup>。

京都駅より南では、やや細粒となる。透水量係数も  $1.6 \sim 2.8 \times 10^{-3} \text{ m}^2/\text{s}$  程度になる。

被圧地下水は大阪層群中の砂礫層を帯水層とし、粘土層を加圧層として存在する。透水量係数は、 $2 \sim 4 \times 10^{-3} \text{ m}^2/\text{s}$  程度になっている。

地下水位は、不圧地下水についてみると、降雨に直ちに応答し、5～9月に水位が高く、1～2月に低い (図 2-6-25)。被圧水頭は、宇治川以南の地域についてみると、5～10月のかんがい期の揚水による一時的な水位低下はあるものの、年間を通じてそれ程変化はなく、経年的な低下も認められない。しかし、京都市南部、向日市、長岡京市、大山崎町などの地域では、上水道用、工業用の地下水採取が

## 参考文献

- (1) 近畿農政局 (1981): 京都府水文地質図・説明書 (未公表)
- (2) 京都府 (1981): 地下水利用等基礎調査報告書

## 8. 亀岡盆地

### (1) 地形・地質

亀岡盆地は京都盆地と峠一つを隔てて西北方に位置し、桂川上流の大堰川の流域にひらけた盆地である。東西約 3～5 km, 南北約 10 km, 面積約  $32 \text{ km}^2$  の往時の湖盆である。盆地の標高は 100 m 前後、盆地を囲む山地は 400～600 m の標高をもつ。

亀岡盆地は、古生層とそれを貫く花崗岩からなる山地に囲まれた構造盆地である。亀岡盆地にみられる地質はすべて第四紀層と考えられる (表 2-6-10)。

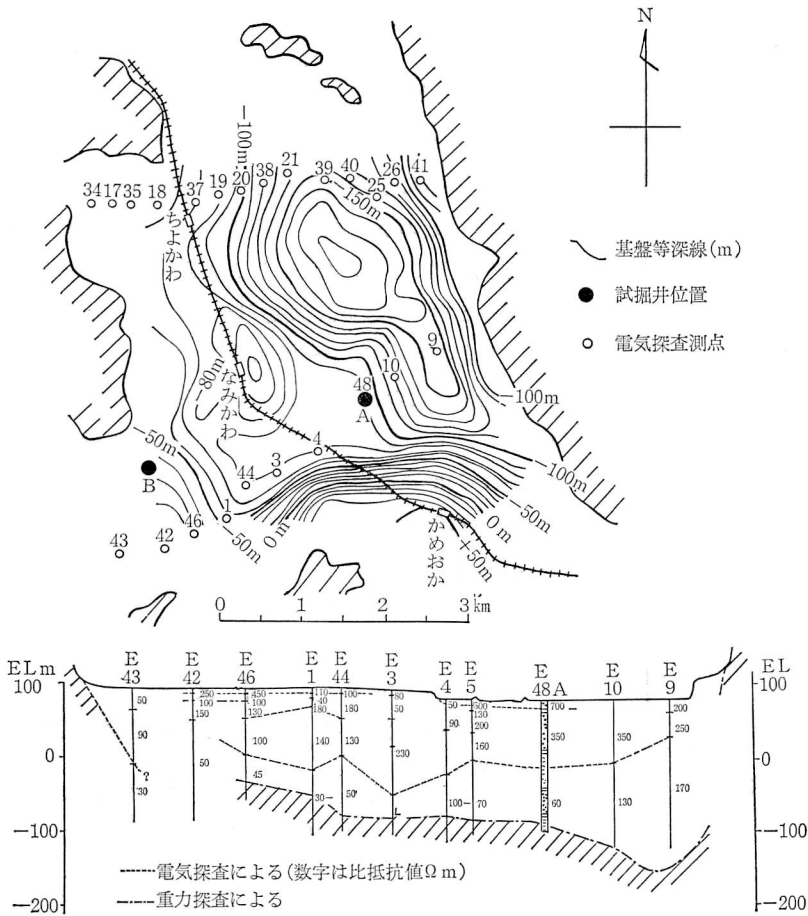


図2-6-27 亀岡盆地基盤等深線図(重力探査による)  
(近畿農政局<sup>(1)</sup>による)

篠層は、地表では盆地東南部の丘陵をつくり、礫、砂、粘土層からなる。なお、篠層の亜炭層から採取された植物化石は大阪層群上部の時代を示す。

高位段丘堆積物は篠町にみられ、表層部が顕著に赤色化をうけた礫層である。

中位段丘堆積物はほぼ 100 m の高度をもつ広い平坦面をなし、主として礫、砂からなる。曾我部町天川には泥炭層があり、植物化石を産し、ウルム氷期に対比されている(図2-6-27)。

## (2) 地下水

亀岡盆地では古くから浅井戸によって不圧地下水が取得され、飲雑用水、かんがい用水源として利用されている。浅井戸の深度は一般に 2~10 m である。

電気伝導度の測定結果では、100  $\mu\text{S}/\text{cm}$  以下の地下水は大堰川沿いの地帯に存在し、周辺の山

表2-6-10 亀岡盆地の地質層序

地質時代	地 層
完新世	沖積層、がすすい、扇状地礫層 最低位段丘堆積物
更新世	中位段丘堆積物 高位段丘堆積物 篠層(大阪層群) (六甲変動)

